

「那賀川水系河川水辺の国勢調査」について

- 那賀川に住む鳥類 -

那賀川の実境状況を把握することを目的に、平成3年度より魚介類や鳥類、植物などの環境調査を行っています。平成14年度には鳥類調査を行いました。
今回の鳥類調査は平成4年、平成9年につづき3回目です。

鳥類調査は今回調査において120種の鳥類を確認しました。
前回調査(平成9年度)の72種と比較すると、48種多く確認されました。(別紙 -)

今回調査においては、これまでの調査時期(4回)に加えて、越冬前期(狩猟期前)及び春の渡り期など、鳥類の渡りの習性を考慮して調査時期を追加(2回)したことが確認種増加の要因の一つと考えられます。

今回初めて確認された種は「ハジロカイツブリ」、「ミユビシギ」、「ヒメアマツバメ」、「アカアシカツオドリ」、「コクガン」など15種でした。(別紙 -)

特定種として、18種類の特定種を確認しました。(別紙 -)
特に珍しい種類として国の天然記念物に指定されている「コクガン(別紙 -)」、環境省のレッドデータブック(2002)で「絶滅危惧1B類」に指定されている「アカアシカツオドリ(別紙 -)」が確認されました。

那賀川事務所では、今回の調査結果をはじめ、既往調査の結果を基に環境に配慮した川づくり等に生かしていきます。

参考資料: [平成14年度 河川水辺の国勢調査\(鳥類\)](#)

平成16年2月13日(金)
国土交通省四国地方整備局
那賀川河川事務所

問合せ先

国土交通省 四国地方整備局 那賀川河川事務所
TEL 0884-22-6461
副所長 小野 重充(内線204)
調査課長 舘 健一郎(内線351)

今回調査と前回調査の確認種数比較表

		今回調査 (H14年度:全6回調査) a	前回調査 (H9年度:全4回調査) b	今回調査 - 前回調査 a - b
繁殖前期	個体数	1 5 8 0	9 8 9	5 9 1
	種数	5 2	4 5	7
繁殖後期	個体数	1 8 5 3	1 0 2 0	8 1 5
	種数	4 6	3 6	1 0
秋の渡り	個体数	2 3 2 0	9 9 4	1 3 2 6
	種数	5 7	3 8	1 9
越冬前期	個体数	3 1 3 4		3 1 3 4
	種数	4 3		4 3
越冬期	個体数	4 2 5 0	2 8 7 3	1 3 7 7
	種数	7 1	4 7	2 4
春の渡り	個体数	3 2 7 9		3 2 7 9
	種数	7 7		7 7
全体	個体数	1 6 3 9 8	5 8 7 6	1 0 5 2 2
	種数	1 2 0	7 2	4 8

今回調査で初確認され種及び特定種一覧表

今回調査で初めて確認された種		今回調査で確認された特定種		特定種出典図書		
				天然記念物	レッドデータブック	徳島県版 レッドデータブック
1	ハジロカイツブリ	1	アカアシカツオドリ		危惧 B	
2	アカアシカツオドリ	2	ヨシゴイ			徳準
3	コクガン	3	チュウサギ		準絶滅	徳準
4	オオドリ	4	コクガン	国天	危惧	徳
5	オボバン	5	オシドリ			徳
6	ミユビシギ	6	ウミアイサ			徳
7	オオソリハシシギ	7	ミサゴ		準絶滅	徳
8	ホウロクシギ	8	ハチクマ		準絶滅	徳
9	セイタイカシギ	9	オオタカ	保存	危惧	徳
11	コマドリ	10	ハイタカ		準絶滅	徳準
12	トラツグミ	11	ウズラ		不足	徳
13	センダイムシクイ	12	シロチドリ			徳
14	キビタキ	13	ミヤコドリ			徳準
15	オオルリ	14	ダイシャクシギ			徳準
		15	ホウロクシギ		危惧	徳
		16	セイタカシギ		危惧 B	徳
		17	コアジサシ	保存	危惧	徳
		18	コマドリ			徳準

特定種出典図書

指定区分	指定区分詳細
特天	文化財保護法 特別天然記念物
国天	文化財保護法 国指定天然記念物
保存	種の保存に関する法律 国内希少野生動植物種
絶滅(RL)	環境庁NRDB 絶滅種
野絶滅	環境庁NRDB 野生絶滅
危惧	環境庁NRDB 絶滅危惧 類
危惧 A	環境庁NRDB 絶滅危惧 A類
危惧 B	環境庁NRDB 絶滅危惧 B類
危惧	環境庁NRDB 絶滅危惧 類
準絶滅	環境庁NRDB 絶滅危惧
地域RL	環境庁NRDB 地域個体群
不足	環境庁NRDB 情報不足
徳	徳島県の絶滅のおそれのある野生生物(2001)における絶滅危惧 類種
徳	徳島県の絶滅のおそれのある野生生物(2001)における絶滅危惧 類種
徳準	徳島県の絶滅のおそれのある野生生物(2001)における準絶滅危惧種

コクガン【カモ目カモ科】	
カテゴリー	環境省 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物<鳥類2002> (レッドデータブック):絶滅危惧 類 徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001(徳島県版レッドデータブック):絶滅危惧 類 1971年 国の天然記念物に指定
形態	全長約61cm。頭から首、胸は黒色で首に不規則な白斑がある。背は黒褐色、尾羽は黒色だが上下尾筒は白色。嘴は黒色である。
分布・生息状況	北極海沿岸のツンドラ地帯で繁殖し、冬期には太平洋・大西洋の温帯の海岸地域で越冬する。日本には冬鳥として主に北海道や東北地方など北日本に渡来し、少数が関東地方以南にも渡来する。1月中旬のガンカモ科鳥類生息調査では、1970年～1997年までの間では、全国で60羽(1984年)～638羽(1983年)の記録しかない。 今回の調査で1月20日(3羽)、21日(4羽)、22日(5羽)、23日(3羽)が確認された。
特記事項	徳島県内では那賀川で5～10年に一度程度は確認されている。また、非狩猟鳥であるが1979年(吉野川)、1991年(那賀川)で過去に心ない狩猟者に射殺されたことがある。那賀川での過去2回(平成4年度、平成9年度)の河川水辺の国勢調査(鳥類調査)では確認されていない。那賀川の河川・溪流環境アドバイザーは、鳥類については、小林實委員(前徳島市教育長)に委嘱している。
参考文献	改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(鳥類2002) 環境省 徳島県の絶滅のおそれのある野生生物2001 原色 日本野鳥生態図鑑 水鳥編 保育社



那賀川を遊泳するコクガン
(平成15年1月23日 土居敏幸撮影)

アカアシカツオドリ【ペリカン目カツオドリ科】

カテゴリー	環境省 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(鳥類2002) :絶滅危惧 B類 通称レッドデ - タブック。 絶滅危惧 B: Aほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
形態	全長約70cm。成鳥の羽色には、全身白色の白色型、全身が灰褐色の褐色型、その中間型がある。どの羽色型の成鳥も足は赤色、嘴は青紫色である。幼鳥は成鳥褐色型と似るが、黒色の嘴と暗色の脚で識別できる。
分布・生息状況	世界中の熱帯から亜熱帯海域に広く分布する。日本では、小笠原諸島・琉球列島に飛来する。琉球列島南部の仲ノ神島で1975年と1977年に1つがい繁殖した記録がある。徳島県では、初めての飛来である。外洋性の海鳥で海岸や内陸で記録されるのはごく稀である。
特記事項	那賀川の河川・溪流環境アドバイザー - は、那賀川での河川環境への指導助言をもらうため四国地方整備局が委嘱しており、現在、専門分野毎に16名いる。鳥類については、小林實委員(前徳島市教育長)に委嘱している。
参考文献	改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(鳥類2002) 環境省 原色 日本野鳥生態図鑑 水鳥編 保育社



那賀川河口でカモメとともに羽を休めるアカアシカツオドリ(中央の脚の赤い1羽のみ)
(平成14年11月5日 土居敏幸撮影)

参考資料

河川水辺の国勢調査 (鳥類調査)

平成14年度 調査結果報告書

平成16年2月
国土交通省
那賀川河川事務所

目次

平成14年度 河川水辺の国勢調査(鳥類調査)の総括

資料編(鳥類調査)

1. 河川の概要
2. 調査内容
 - (1) 調査時期
 - (2) 調査地区
 - (3) 現地調査結果の概要
3. 現地調査で確認された鳥類出現リスト
4. 写真票

平成14年度 河川水辺の国勢調査(鳥類調査)の総括

【河川水辺の国勢調査の構成】

河川水辺の国勢調査は、次の6項目の調査から構成されています。

- ・ 魚介類調査
- ・ 底生動物調査
- ・ 植物調査
- ・ 鳥類調査
- ・ 両生類・爬虫類・哺乳類調査
- ・ 陸上昆虫類等調査

各生物調査は、それぞれの河川において5ヶ年に1回以上実施し、一定の5ヶ年間で全ての生物調査を1巡させます。今回報告する「平成14年度 河川水辺の国勢調査(鳥類調査)」は鳥類調査の3巡目に該当します。(前回調査は平成9年度、前々回は平成4年度に実施)

なお、今回の報告は国土交通省による那賀川・桑野川の調査結果について整理しています。

【鳥類調査】

調査の内容

平成14年繁殖前期(6月11～13日)、繁殖後期(7月22～23日)、秋の渡り(9月17～20日)、越冬前期(11月5～6日、8日)、越冬期(1月20～22日、24日)、春の渡り(4月16～18日)の6回、那賀川・桑野川の直轄管理区間において現地調査を実施しました。

調査方法

現地調査は、ラインセンサス法・定点記録法・夜間調査・集団分布地調査により行いました。

調査結果の概要

今回調査の結果、120種の鳥類を確認しました。前回調査(平成9年度調査)の72種と比較し48種増加しています。原因は、前回調査の回数4回に対し今回鳥類の渡りの習性を考慮して調査時期を設定し、2回追加の計6回調査を行っている為です。特定種としてアカアシカツオドリ、ヨシゴイ、チュウサギ、コクガン、オシドリ、ウミアイサ、ミサゴ、ハチクマ、オオタカ、ハイタカ、ウズラ、ミヤコドリ、シロチドリ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、セイトカシギ、コアジサシ、コマドリの18種が確認されました。

(注) 特定種の定義

本資料では、次に該当する動植物を特定種とよんでいます。

「文化財保護法」の特別天然記念物および天然記念物

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種及び緊急指定種

「自然公園法」による指定植物

環境省編(2003)「日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-」掲載種

環境省編(1976)「緑の国勢調査報告書」における「すぐれた自然の調」主要野生動物一覧の掲載種

環境省編(1982)「緑の国勢調査(第2回自然環境保全基礎調査)」における「日本の重要な淡水魚類」環境省指定種・「日本の重要な昆虫類」指標昆虫類・「日本の重要な両生類・爬虫類」調査対象種

環境省編(1983)「緑の国勢調査(第2回自然環境保全基礎調査)」における希少種(鳥類)

我が国における保護上重要な植物種及び植物群落の研究委員会植物種分科会(1989)「我が国における保護上重要な植物種の現状」掲載種

水産庁編(1998)「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック」掲載種

徳島県の絶滅のおそれのある野生生物(2001)掲載種

都道府県等の指定は徳島県を指します。

また、今回及び前回調査において確認された特定種は、別表「特定種一覧表」を参照願います。

資料編(鳥類調査)



1. 河川の概要

那賀川はその源を徳島県那賀郡剣山(標高 1,955 m)の急峻な山地部に発し、海川、海部谷川、坂州木頭川、古屋谷川、紅葉川、赤松川、谷内川、中山川、加茂谷川、桑野川などの支川を合わせつつ、那賀平野を東へ貫流して紀伊水道へ注ぐ、流域面積 874km²、幹線流路延長 125.2km の一級河川である。

流域は徳島県の 2 市 6 町 2 村より構成され、その多く(上流域～中流域)は、四国地方東部の山岳地域にある。流域の多くを占める山岳地帯の流域面積は 803 km²(92%)と流域の約 9 割を占め、平地は下流域に 39 km²(5%)あるだけで、全流域面積の 1 割にも満たない。流域内の人口は約 5 万人である。

水質を BOD75 % 値の最近の 10 年間(平成 3 年～平成 12 年)の平均値で見ると、本川的那賀川橋で 1.0mg/L であるが、支川桑野川の富岡新橋では 2.6 mg/L と高い値を示している。

河川形態について那賀川を見ると、上流域には小見野々ダム、長安口ダム、川口ダムがあり、それぞれのダムの上流域には停滞水域が広がっている。ダム下流から北岸堰にかけては、流路は蛇行性に富み、瀬と淵が存在する中流域の様相を呈し、河床は礫質である。北岸堰から大京原橋の間は、直線的な河道の中に典型的な交互砂州が形成されている。大京原橋から下流では静水域が広がっている。また、支川の桑野川は田園地帯を流れており、河川勾配が緩やかである。なお、河口海岸部から那賀川 6km 付近、桑野川 5km 付近までは感潮域となっていて、低水路には干潟が見られる。

2. 調査内容

(1) 調査時期

那賀川水系の那賀川・桑野川において、現地調査を地域における鳥類の季節移動型ごとの最適な確認時期を把握し、従来の調査回数・時期の再検討を行った結果、回数については、前回の4回から2回追加し、以下の6回を実施した。

繁殖前期 平成14年6月11～13日

繁殖後期 平成14年7月22～23日

秋の渡り 平成14年9月17～20日

越冬前期 平成14年11月5～6日、8日(那賀川河口、那那那1・2のみ)

越冬期 平成15年1月20～22日、24日

春の渡り 平成15年4月16～18日

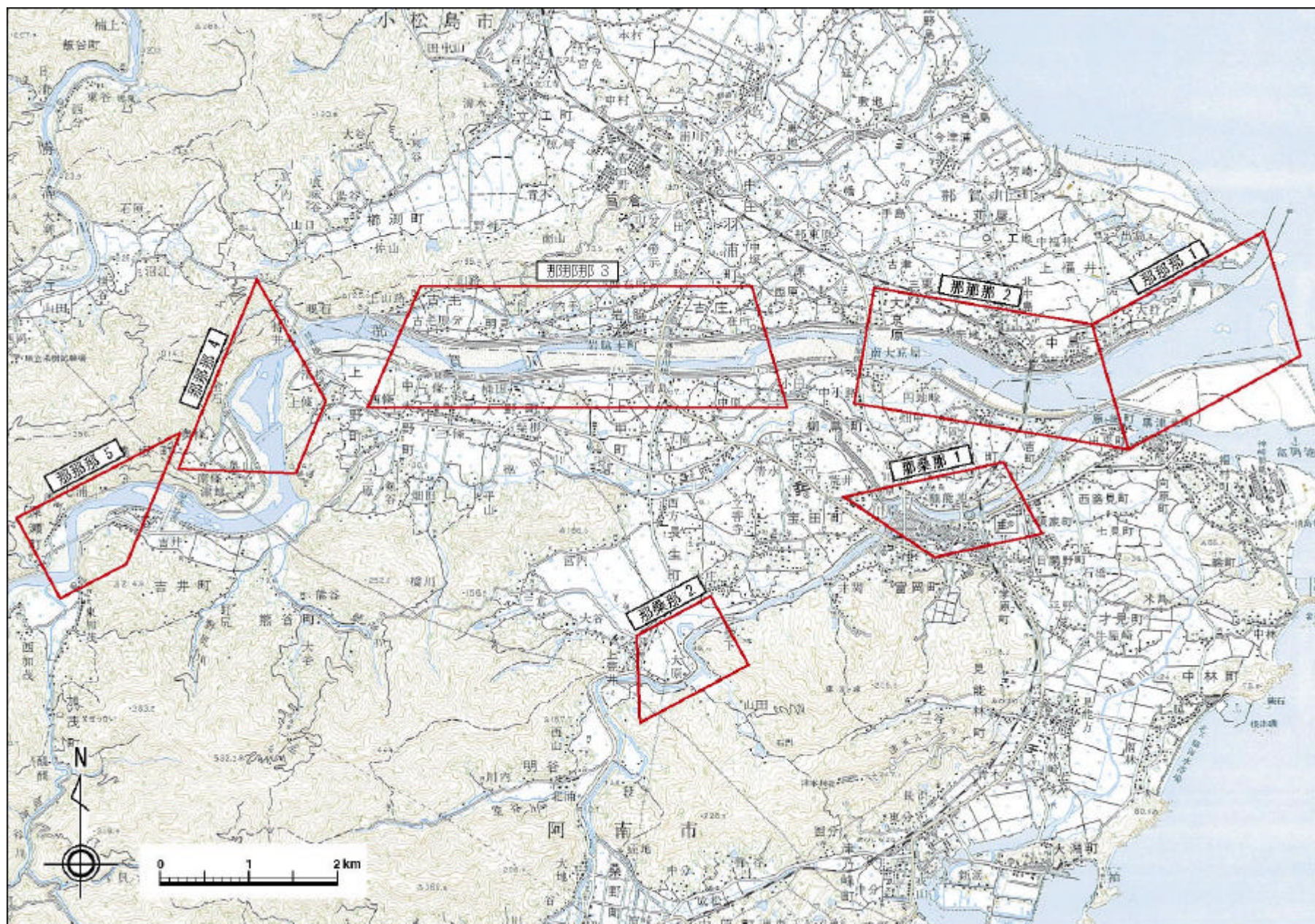
(2) 調査地区

調査地区は、那賀川・桑野川における直轄管理区間とした。

河川名	地区番号	全体調査地区	距離	左右岸	地区名	観察面積	選定根拠	地区の特徴	前回調査地区との対応
那賀川	那那那1		0.0km ～ 2.1km	左岸	河口	136ha	前回調査結果と比較・検討するために前回と同地点とした。	左岸よりに比較的大きな中州があり潮の干満により干潟が形成される。塩生植物が生息している。	那那徳1に相当する。
	那那那2		2.1km ～ 4.7km	左岸	中島	119ha	前回調査結果と比較・検討するために前回と同地点とした。 全体調査地区である。	環境は河口とほぼ同様で、干潮時には干潟が形成され、塩生植物が生息している。	那那徳2に相当する。

河川名	地区 番号	全体 調査 地区	距離	左 右 岸	地区名	観察 面積	選定根拠	地区の特徴	前回調査 地区との 対応
	那那那 3		6.0km ~ 10.0km	左 岸	那賀川橋 上流	140ha	前回調査結果と 比較・検討する ために前回と同 地点とした。	淡水域の下流端 付近。平瀬・早 瀬・淵が形成さ れ、水際部には ツルヨシ群落が ある。	那那徳3 に相当す る。
	那那那 4		11.2km ~ 13.4km	右 岸	南岸堰下 流	121ha	前回調査結果と 比較・検討する ために前回と同 地点とした。	南岸堰の直下 流。河川敷は草 地から樹林まで 多様な植生がみ られる。	那那徳4 に相当す る。
	那那那 5		15.0km ~ 16.8km	両 岸	中央橋	53ha	前回調査結果と 比較・検討する ために前回と同 地点とした。	大きなM型の淵 があり、中央橋 の上流側に早瀬 がある。河川敷 は植物の生育が 少ない	那那徳5 に相当す る。
桑野川	那桑那 1		3.6km ~ 5.3km	両 岸	富岡橋	17ha	前回調査結果と 比較・検討する ために前回と同 地点とした。	感潮域。左岸側 に岡川が流入 し、ヨシ帯が存 在する。	那桑徳に 相当す る。
	那桑那 2		7.5km ~ 9.1km	左 岸	大原	16ha	前回調査結果と 比較・検討する ために前回と同 地点とした。 全体調査地区で ある。	川の蛇行により 淵が形成され緩 やかな流れを呈 している。下流の 一の堰で時期に より湛水する。	那桑徳2 に相当す る。

:全体調査地区



(3) 現地調査結果の概要

那賀川水系における2002年度の鳥類現地調査は、繁殖前期(6月11～13日)、繁殖後期(7月22～23日)、秋の渡り(9月17～20日)、越冬前期(11月5～6、8日)、越冬期(1月20～22日、24日)、春の渡り(4月16～18日)の6回実施した。調査区間は、那賀川5地区、桑野川2地区の計7地区に設定した。

調査方法はライセンス法を基本としたが、鳥類が蟄集しやすく、さらに周囲が開けた場所がある、那那那1(河口)、那那那2(中島)、那那那4(南岸堰)、那桑那1(富岡橋)の4区間に調査定点を各1地点設定し、定点記録法も併用して実施した。また、夕刻から夜間にかけて、集団のねぐら入り郡および夜行性鳥類調査を実施した。調査は繁殖前期、繁殖後期、越冬期の那桑那1を除く区間で実施した。

本年度における調査で確認した鳥類は、帰化種、家禽の放籠鳥を合わせて120種16,398個体であった。季節別の出現状況は繁殖前期 52種1,580個体、繁殖後期 46種1,835個体、秋の渡り:57種2,320個体、越冬前期 :43種3,134個体、越冬期 :71種4,250個体、春の渡り:77種3,279個体であった。季節移動型で分類すると、留鳥39種6,421個体、夏鳥17種334個体、冬鳥40種8,955個体、旅鳥20種216個体、迷鳥1種1個体、帰化種2種440個体、放籠鳥1種11個体、未同定種20個体であった。種数は、春の渡りに77種と最も多い種が確認され、個体種は、越冬期に4,250個体と最も多く確認された。年間をとおして留鳥及び冬鳥が出現した鳥の大部分を占めた。

地区別にみると、本川は、那那那1(河口付近)67種5,325個体、那那那2(中島付近)57種4,303個体、那那那3(那賀川橋上流付近)67種2,736個体、那那那4(南岸堰下流付近)65種1,083個体、那那那5(中央橋付近)48種920個体であった。また、那賀川支川の桑野川の那桑那1(富岡橋付近)42種1,554個体、那桑那2(大原付近)47種477個体であった。那賀川は、下流ほど種類・個体数ともに増加するという傾向がみられた。

集団分布地としては、イカルチドリの集団繁殖地を中央橋下流で確認。集団ねぐらは、サギ類が那賀川橋上流をねぐらとしていることを確認した。ねぐら入り群は、ツバメの群を南岸堰下流で確認したが、持井橋から勝浦川方面に飛去した。ムクドリは、河口付近で辰巳工業団地方面に飛去する群れを確認した。ハクセキレイは、中島付近で確認したが下流方面に飛去した。

集団越冬地としては、カモ類・カモメ類・カワウが越冬前期から春の渡りまで河口付近で見られ、桑野川の富岡橋付近では越冬期にカモの群れを確認した。

渡り鳥の群れとしては、春の渡り期にシギ類チドリ類の群れを河口付近で確認した。その他、イカルチドリの群れを、那賀川橋下流、ハシボソガラスは大京原橋下流、サギ類は那賀川橋上流、カモメ類・カワウは河口付近、カワウは南岸堰下流でそれぞれ確認されました。

考察 評価

地建 都道府県名	事務所 部局名	水系名	河川名	調査年度
四国地方整備局	那賀川工事事務所	那賀川	那賀川	2002

(e)鳥類の生息と河川環境の関わりについて

1. 既往文献および過去の河川水辺の国勢調査との比較

今回の現地調査では、15目37科120種を確認した。確認種は、前回(1997年度)の現地調査の確認種(72種)より48種多く、過去的那賀川水系の確認リストに新たに15種の鳥類を加えることができた。これによって、現地調査と既往文献で確認された鳥類を合わせた確認総種数は、16目43科164種になった。

今回の調査における確認種の目別の組成は、前前回、前回調査と比較して大きく増加している。これは、これまでの調査時期に加えて、越冬前期および春の渡り期など、鳥類の渡りの習性を考慮して適切な調査時期を追加したことが要因のひとつとしてあげられる。このことによって、前回と比較してカモ目3種、チドリ目13種、スズメ目19種など、これまで以上に那賀川水系の直轄管理区間の在来種および渡り鳥の生息状況を把握することができた。

2. 集団分布地とねぐら

鳥類の集団分布地は、「集団繁殖地」、「集団ねぐら」、「集団越冬地」、「渡りの集団中継地」、「その他」のカテゴリに分類することができる。今回調査の概要は次のとおりである。

「集団繁殖地」

中流域の河川敷や中洲の砂礫地にチドリ類、南岸堰下流に広がる河畔林にサギ類の集団繁殖地が見込まれたが、調査では中央橋下流の河川敷にイカルチドリ10個体ほどの繁殖している小群が確認された程度であった。一方、サギ類は、那賀川橋上流右岸の低木林上にアオサギ90個体ほどの群れが見られたが特に繁殖に至る兆候はなかった。夜間調査時においても確認されたことから、那賀川を餌場としているアオサギがねぐらとして利用している可能性がある。また、調査範囲以外ではあるが、那賀川町出島にあるゴルフ場の緩衝林帯では、4月の調査時に7巢のアオサギのコロニ - を確認した。

「集団ねぐら」

河川内に集団でねぐらをとっていた種としては、前述のアオサギが該当する。最も個体数が多かったのは繁殖後期の7月で、低木上の個体と周辺の砂礫地の個体も併せて130個体ほどの群れを確認した。

一方、河川敷のアシ原など高茎草に集団でねぐらをとることで知られるツバメや、竹林やエノキ林など河畔林にねぐらをとることがあるムクドリ、橋梁など構造物をねぐらとするハクセキレイは、河川域で就壻前の集合群を確認した。しかし、ツバメは持井橋から勝浦川に移動していたこと、ムクドリは辰巳工業団地に飛去すること、ハクセキレイは阿南市方向に見失ったことから、堤内地に集団ねぐらが存在するものと推察された。

「集団越冬地」

越冬前期と越冬期および前後の秋の渡り期と春の渡り期にかけて、那賀川水系で集団越冬する種を確認した。越冬群は水鳥が主で、那賀川および桑野川ともに感潮域に多かった。那賀川では0.0～2.7kmの区間にカモ類、カモメ類、カワウが特に多く、最多個体数で見ると、カモ類はヒドリガモを優占種とする約1,100個体、カモメ類はウミネコを優占種とする約5,500個体、カワウは約190個体をカウントした。一方、桑野川はカモ類が構成主体となり、富岡橋から下流にヒドリガモやオカヨシガモなど約700個体を確認することができた。

「渡りの集団中継地」

渡り鳥には、繁殖地と越冬地の間を移動中に、集団で立ち寄り休息する中継地がある。那賀川水系では河口周辺の干潟を利用しているようであった。アジサシは、9月の秋の渡り期に河口干潟で採餌および休息する90個体ほどの群れを確認することができた。また、4月の春の渡り期には、河口干潟で採餌するハマシギ、オバンギ、キヨウジヨシギ、オオソリハシシギ、メダイチドリ、ダイゼンなど90個体ほどのシギ類チドリ類の群れを確認することができた。

「その他」

その他に、南岸堰上流の淵では集団で採餌するカワウの群れや、大京原橋下流の河川敷に集まったハシボソガラスなどがある。いずれも、那賀川水系を広範囲に移動し、採餌や休息時に集団をつくる習性がある。そのために突発的に堤外地を利用した例であった。

3. 鳥類と調査区間の環境との関わり

那賀川の調査区間は、沖積平野の始まりから紀伊水道に至るまでの区間に該当する。また、桑野川の調査区間は沖積平野を蛇行し農耕地、市街地をとる緩流河川である。

那賀川本川の鳥類相は、下流ほど種類数、個体数共に多い傾向が見ることができる。これは、一般的な河川に生息する種(サギ類、セキレイ類、カワセミ類、ホオジロ類、淡水性カモ類等)に加えて、河口に近いほど海洋性種(カモメ類、シギ類チドリ類、海水性カモ類等)の群れが入った結果である。一方、桑野川では種類数は上流側が多く、個体数は下流側が多かった。下流側で種類数が少なかった要因として、河川が市街地を貫流し周囲の農耕地や山林と分断されているうえ、護岸がコンクリートやブロックで改修されて高水敷が一部道路に利用されるなど、河川の自然環境が単調で多様性に欠けることがあげられる。しかし、感潮域であるため干潟、ヨシ原が存在するため、カモ類、サギ類、カワウなどの水鳥類の群れが見られ個体数は多かった。上流側は、周囲に農耕地や山林が隣接し、草地のある高水敷が存在する。そのため平地から山地性種まで多種多様な種類が確認できた。しかし、河川改修により水路化し、堰上げにより静水域になった水辺には、陸域と水域の間にある水深の浅い「移行帯」がないため、水辺を利用する種類が極端に少なかった。

考察 評価

地建 都道府県名	事務所 部局名	水系名	河川名	調査年度
四国地方整備局	那賀川工事事務所	那賀川	那賀川	2002

() 今回の調査全体に対する照査実施者の所見

・今回の調査全体に対する所見

調査を適切な時期に実施し、全体の調査回数、夜間調査・集団分布地調査の回数を増やしたことで、今までにない詳細なデータが得られたと思う。また、アカアシカツオドリ、コクガンをはじめとする特定種の確認も多く、非常に重要なデータが得られた。さらに、考察も詳細になされており、よくまとまっている。

・次回の調査を実施する際の課題

今回非常に詳細に調査されているので、次回以降も今回調査の時期・回数・頻度を踏襲して調査してほしい。
コアジサシが近年減少しているので追跡的な調査を行ってほしい。
逆にカワウは増加傾向にあり、アユの養殖場等で捕食による被害が発生している。行動範囲が広いため徳島県だけでなく、四国全体で生態を把握する必要がある。

鳥類経年出現状況一覧表


整理様式 7

地建 都道府県名 四国地方整備局		事務所 部局名 那賀川工事事務所		水系名 那賀川		河川名 那賀川		調査年度 2002	
No.	種名	河川水辺の国勢調査		文献調査					
		前回	今回	文献 1	文献 2				
		1997	2002	1978	1992				
1	シロエリオオハム								
2	カイツブリ								
3	ハシロカイツブリ								
4	ミカイツブリ								
5	カムリカイツブリ								
6	オオミスズキドリ								
7	ハシホミズズキドリ								
8	アカアジカヅドリ								
9	カワウ								
10	クミク								
11	ヨシゴイ								
12	ユイサキ								
13	ササゴイ								
14	アマサキ								
15	タイサキ								
16	チュウサキ								
17	コサキ								
18	アオサキ								
19	ヘラサキ								
20	クロツラヘラサキ								
21	ユカク								
22	カチウ								
23	ツクシガモ								
24	オンドリ								
25	マガモ								
26	カルガモ								
27	コガモ								
28	ヨシガモ								
29	オカヨシガモ								
30	ヒドリガモ								
31	オナガガモ								
32	ハシビロガモ								
33	アヒル								
34	ホシハシロ								
35	キンクロハシロ								
36	スズガモ								
37	ホオジロガモ								
38	ウミアイサ								
39	ミサコ								
40	ハチクマ								
41	ヒ								
42	オシロシ								
43	オオカ								
44	ツミ								
45	ハイカ								
46	ノスリ								
47	オシハ								
48	ハイロチュウビ								
49	チュウビ								
50	ハヤブサ								
51	チヨウケンホウ								
52	ウスラ								
53	コジュケイ								
54	キジ								
55	クイナ								
56	ヒゲナ								
57	ハシ								
58	オオハシ								
59	タマシキ								
60	ミヤコトリ								
61	コトリ								
確認 種数	調査対象区間内での確認種 ()								
	その他の水域で確認された ()								
	調査対象区間内かどうか確定 不能 ()								
	総 合 計								

現地調査時に撮影された特定種

<p>No. 1 写真標題 特定種</p> <p>説 明 アカアシカツオドリ</p> <p>環境省:絶滅危惧IB類</p> <p>撮影年月日 2002/11/05</p>	
<p>No. 2 写真標題 特定種</p> <p>説 明 セイタカシギ</p> <p>環境省:絶滅危惧IB類 徳島県:絶滅危惧I類</p> <p>撮影年月日 2003/04/18</p>	
<p>No. 3 写真標題 特定種</p> <p>説 明 コクガン</p> <p>国指定天然記念物 環境省:絶滅危惧II類 徳島県:絶滅危惧II類</p> <p>撮影年月日 2003/01/20</p>	

現地調査時に撮影された特定種

<p>No. 4 写真標題 特定種</p> <p>説 明 ウミアイサ 徳島県:絶滅危惧II類</p> <p>撮影年月日 2003/04/16</p>	
<p>No. 5 写真標題 特定種</p> <p>説 明 ミサゴ 環境省:準絶滅危惧、 徳島県:絶滅危惧II類</p> <p>撮影年月日 2002/09/20</p>	
<p>No. 6 写真標題 特定種</p> <p>説 明 シロチドリ 徳島県:絶滅危惧II類</p> <p>撮影年月日 2002/07/22</p>	

現地調査時に撮影された特定種

<p>No. 7 写真標題 特定種</p> <p>説 明 ハウロクシギ</p> <p>環境省:絶滅危惧II類 徳島県:絶滅危惧II類</p> <p>撮影年月日 2003/04/16</p>	
<p>No. 8 写真標題 特定種</p> <p>説 明 ミヤコドリ</p> <p>徳島県:準絶滅危惧</p> <p>撮影年月日 2002/09/17</p>	